

いないわけですから。しかし、今はその頃とは時代も環境も違うわけだし、共働き家庭も増えてますからね。同じことしてたらすぐに行き詰ってしまうと思います。だから、自分の父親像を一度相対化してみて、いまの自分の家族や暮らしに合わないのなら修正する必要がありますでしょう。Fathering Japanには25名のメンバー(父親会員)がいます。つまり25通りの父親モデルがあるわけで、それを情報として発信したいんです。小さい子のいるお父さんやこれからパパになる人たちのためにFathering Japanがその「父親の多様性」を示すことで「ああ、父親にもいろいろいるんだなあ。さまざまでいいんだ」と受け取って欲しい。そしてそのネットワークがコミュニケーションの場になってヒントを与え合ったり、父親ならではの楽しい子育て情報を提供できたりしたらいいなあと思っています。

### ーワーク・ライフ・バランスについては？

乳幼児のいる父親は夜8時ぐらいまでは、家に帰れるようになってほしいと思います。「子育てしたくても仕事でそれどころじゃない」という人が多過ぎますね。評価主義を導入して社員に過重な責任を課す企業もよくないのですが、個人の意識の問題も大きいと僕は思います。父親が精神的に健康であるということが大事なんだけど、個人も企業もどうしたらいい状態で仕事も家庭生活も楽しめるかということをもっと真剣に考えるべきでしょう。就業時間後に帰りづらかったり、育児休暇がとりづらかったり、そんな職場がまだ多い。子どもが生まれた父親が子育てしたいのにそれをさせない会社のムード(悪しき不文律)って、ある意味「人権問題」だと僕は思います。制度はあっても機能していないんだから。それっておかしいですね。でもみんな「仕方ない」と諦めている。そんなんじゃ、何も変わらないと思います。

今後、働く人の精神衛生がよくない(メンタルケアができてない)企業の業績は必ず落ちます。これからの時代、そういう視点で企業は経営のリスクヘッジ(危機を回避すること)を考えるべきでしょう。「自分の会社の社員は幸せな人生を送っているのか？」あらゆる企業のトップたちがそういう観点でマネジメントをするようになれば、子育ても仕事も楽しくなって笑う父親が増え、それがひいては企業の業績にも反映することでしょう。まずは、ワークシェアリング(より多くの人で仕事の総量を分け合うこと)の仕組みを取り入れたりして総労働時間を減らすことが必要ですが。

また最近、新規人材採用が「売り手市場」のせいか、人事部の意識が変化しています。<ワーク・ライフ・バランス>、<ダイバーシティ(多様性)推進> <子育て・介護支援> といったテーマで、求人の際に複合的な動きが出てきています。この辺りに僕は期待したいですね。

### ー安藤さんの子育ての中で、絵本とは？

「教育アイテム」でなく、親子でハッピーな時間を楽しむための「コミュニケーション・ツール(道具)」ですね。また「絵本は子どものものだ」と思っている人が多いけど、大人にとっても素晴らしいものです。分厚い哲学書に書いてあることが、素敵な絵と短い言葉で表現されている。僕は子ども以上に絵本の奥深さにハマってしまいましたね。

### ー新プロジェクトは？

「パパ検定」という検定試験を来年実施します。これは父親の子育てスキルの優劣を問うものではありません。設問のカテゴリーは、子どもの発達・遊び・環境や、家族・仕事・社会・お金・制度・など多岐に渡ります。親として当然知っているべき知識の修得。そして検定を通して子どもや家族への視野を拡げ、コミュニケーションの仕方や子育て環境の変化や対応について学ぶことで、自分らしい父親の構築に繋がるキッカケになればいいと思っています。



### ーいわき市のお父さん達にメッセージを！

これから父親になる人は今もっている父親のイメージ、父親モデルを疑ってみること。どうやったら子どもや家族と楽しい人生を送ることができるかを、じっくり考えてみてほしいと思います。

乳幼児がいる人は、まず現在の働き方を見直して、子どもと関わる時間を作る、たくさん持つことです。子どもの健やかな成長のためには母性・父性双方のスキンシップの量が大事です。子どもはあつと言う間に大きくなってしまいます。あとで「やってあげばよかった」と後悔しないでほしいです。

子育てを楽しむためには、「主体的であること」が大事です。奥さんの「指示待ち」だったり、マニュアル情報ばかりに惑わされないで、自分なりの方法・スタイルを考えてほしい。子どもとのコミュニケーションも自分の得意業(絵本・プラモ・音楽・スポーツなど)を通して子どもと楽しめば必ず楽しくなります。そういう笑っているお父さんを、子どもはいつも待っていると思うんです。子どもを育てることほど重要なプロジェクトはありません。そして父親ほど楽しい仕事はないのですから。